



西部戦線異状なし

レマルク[著] 秦豊吉訳
新潮社 1955 (新潮文庫)

人間科学部教授 岡村 陽子

この本の舞台は第1次世界大戦下のドイツである。20歳そこそこの少年と言ってもいいパウル
の目を通して描かれているのは、教師に引率されク
ラスごとまとめて出征志願を申し出て前線に放り
出されてからの日常である。この話自体は100年
以上も前のヨーロッパの出来事であり、今の平和
な日本とはかけ離れた生活であるが、パウルの日
常、そして心情は決して我々とかけ離れたもの
ではない。学校に通い、友達とふざけ、女の子のこ
とをちょっと気にかけていた日々。パウルが大事に
していたものは、多少の空想と、少しばかりの趣
味と、それから学校であって、女の子にさえまだ
生活のすべてを奪われるところにはいっていな
かった。そんなパウルも、あつという間に戦争に
放り込まれ、見る見るうちに周囲の環境も、そし
て自分も変わっていく。戦闘、砲火、死、食事、そ
して、また、戦闘、砲弾、死、あるいは、たまに生。
そんな毎日の繰り返しの中で、幼馴染も懐かしい
我が家に帰れることなく死んでいき、戦地で知り

合った戦友も一人減り、二人減りしていく。パウ
ルには出征する前に大事にしていたものは何も残
されていない。机の引き出しに残してきた書きか
けの脚本や詩でさえ、もう本当のことには思え
ず、想像することもできない。休暇で故郷に帰っ
ても、自分の部屋はもう元の自分の部屋ではない。

わたしがはじめてこの本を読んだのはパウルと
同じ20歳よりも少し前のことだった。そのときの
私には、パウルの自分が変わってしまっ
て昔の自分ではもうないという痛切な感情は自分のもの
のように胸にせまった。本書は戦争の悲惨さを学ぶ
ために読むのではなく、青春小説として読んで十
分に面白い。何年もたって読み返した時に最初
に感じたほどの切なさを感じ取れなかったことを思
い出すと、まさにこれはパウルと同年代の者のた
めの小説であり、パウルの体験を自分に重ね合
わせて読める大学生の時にぜひとも通読してもら
いたい本である。